

第十七章…軍事的所見

「…そして、あなたは語った

出撃と撤退について、塹壕、テントについて、

矢来、辺境、胸壁について、

真鍮銃について、大砲、マスケット銃について。」

「ヘンリー四世」 第一部・第二幕・第三場

軍とかかわりのない多くの人に読まれるべき本がある程度成功するためには、完全に軍事的考察に費やされた一章は一見不適切かもしれない。しかし私は近年、博識になることを望むすべての人がすべての他人の仕事の表面的な知識を持ちたがっていることを覚えている。グラッドストーン氏が「時代における軍国的精神の高まり」と呼んでいるものにも勇気づけられて、専門的になることを避けつつ純粹に専門的な観点から辺境戦争をしばし一瞥することが一般的な関心事になることを私は願っている。私の所見は私が述べた戦域に当てはまるものとして捉えられるべきであるが、その多くが辺境全体に当てはまることを私は疑わない。

最初の最も重要な考慮事項は輸送である。これがどんなに重要事なのかを自分で見たことのない人は誰も理解できない。半個歩兵大隊に護衛された一マイル以上のラクダの護送隊を見たときの私の驚きをよく思い出す。私はそれが一個旅団のたった二日間の物資にしか相当しないことを知らされた。人々はあちらへこちらへと移動している縦隊のことをまるでそれがその土地を行軍し、単にどこで敵と出会うとも戦わなければならぬ兵士の移動グループであるかのように軽々しく話す。そして軍隊は固定基地と安全に結ばれるために前進兵站部、宿場、休養キャンプ、通信の長い鎖をその後ろに苦勞して引きずる重い塊であることを理解している人はほとんどいない。車輪の通行が不可能なこれらの谷では、物資の移動の困難さとコストは莫大である／そして現地調達は全くできないか、ほとんどできないのでその熟慮は最重要である。多くの理由でラバ輸送はラクダ輸送よりも優れている。ラバはより速く動き、より難しい地面を通過できる。またそれはより丈夫で良い健康状態を保つ。ピンドン・ブラッド卿はモーマンドに対して前進を始めるとき、第二旅団にラバを完全装備した。これによってその可動性が高くなり、必要とされるあらゆる急速な移動に利用できるようになった。その二つ—ラクダとラバを混ぜると両方の欠点が結びついて互いの優位性を消してしまうように見える。

私はすでにインドの軍務キャンプと、それなしでは辺境の夜は完全と言えない「狙撃」について説明した。したがって以前それが専門的なのではないかと疑ったため省略していた二つのポイントにだけ触れることにする。ときに夜間射撃はより深刻な攻撃や実際の急

襲や剣の突進に変わることがあるため、敵に相対して塹壕の溝を掘ることをお勧めする。近代的な武器があったとしても、最後に頼りになるのは銃剣であり、そのとき高地にいることの利点は相当なものである。

砲兵隊がキャンプ周りのラインの一部を形成するとき、砲の間には歩兵が配置されるべきである。砲兵士官はこれを好まない／彼らは非常に良い仲間であるが、譲歩してはならない事柄がいくつかある。誰もがその武器の力を過大評価しがちである。

マムンド渓谷ではすべての戦闘は村を占領することで起こった。村は山のくぼみの中の岩が多く凸凹した地面にあって、機敏なライフル射手の群れに守られていた。素早く動き回る敵の姿への一斉射撃はほとんど役に立たないことがわかった。部族民は一瞬だけ身体をさらして岩から岩へと急速に突進した。そして分隊が彼らに注意を向け、ライフルで狙いをつける前に、チャンスと標的は一緒に消えているのであった。より良い結果が得られたのは上手な射手を選び、チャンスを見つけたら命令を待たずに射撃する許可を与える方法であった。しかし全体的に言うとうまく配置された敵の銃火によって時間を稼がれるだけに終わる銃撃に多くの時間を浪費せず、歩兵は銃剣攻撃で突き進むべきである。

村の奪取と破壊の後、軍隊は常にキャンプに戻らなければならず、撤退が必要であった。現代のライフルで武装した多数の活発な敵に直面してそうした作戦を実行することの困難は大きかった。私は後方中隊でその撤退を目撃する機会が六回あった。五回は幸運、一回は悲惨であったが全てに損失が、そして経験豊富な将校が私に告げたように、危険が伴った。弾が誰にも当たらない限りすべては上首尾であるが、数人の兵士が負傷するとたちまち困難が始まる。その地点が放置されるとすぐに―小丘、穀物の畑、いくらかの岩、またはその他の地面の事物は―敵に奪われる。いくらか密集隊形になって撤退中の中隊に彼らは優れたライフルでよく狙いをつけ、二、三人を殺傷する。今日、文明化された戦争ではこうした負傷者は地面に残され、問題は翌日に交渉によって取り計らわれる。しかし、いかなる慈悲も求められたり与えられたりしない辺境では、負傷者を運び去ることは神聖な義務である。また、すべての連隊がその死者を運び去る奮闘的努力も同じである。部族民が自らの手に落ちたすべての遺体に加える下劣で忌まわしい損壊、およびそれらを晒すことによる侮辱行為は、非哲学的な精神に死への新たな恐怖を追加する。今では身体を運び去るには少なくとも四人の兵士が必要であり、より多くを必要とすることが非常に多い。結果を観察するべきである。誰かが撃たれるということは銃撃ラインから五丁のライフルが引き抜かれることを意味する。一〇人の兵士が撃たれたなら、戦闘力に関する限り、中隊を戦闘から除外しなければならぬ。目ざとい敵が押し進んでくる。負傷者を抱える兵士のグループは素晴らしい標的である。目下、後衛が負傷者に煩わされている。するとそこへ剣による強力な突撃が押し寄せてくる。こうして大惨事が発生する。

時にはある連隊で、時には別の連隊でいくつかの出来事の進行を見ていて、私はこれらの困難を避けるいくつかの方法を観察した。辺境戦争に長く熟練したガイド隊は最も価値あるインストラクターであった。すべての地点は手放すとすぐに敵に奪取されるため、各中隊から二人または三人の兵士を残してすべての撤退を隠す必要がある。彼らは活発な銃撃を続け、全中隊が新しい陣を敷くか、それに近くなったときに駆け戻って合流するのである。これに加えて、撤退中のある中隊の銃火は常に別の中隊を援護するように手配する必要があり、撤退の際には発砲を停止することがあってはならない。援護する中隊は後衛中隊が動き始める前に実際に位置についていて、すぐに発砲する必要がある。九月一八日のガイド歩兵隊の退却に私は特に感心させられた。敵に強力に圧迫される中でこれらの原則が高い技術で徹底して実行され、負傷したのは一兵だけだったのである。指揮官のキャンベル少佐がとった、互いの退却を十字銃火で援護しながら二本の支脈を退却して降りるという有利な方法は軍事的展開というよりも、複雑なチェスの問題に似ていた。

新しいダムダム弾―それは今公式ではないが“e k | d u m”「ヒンドウスタン語で”直ちに”」弾と呼ばれている―を搭載した新しいリー・メトフォード・ライフルの威力は途方もないものである。一度使えば兵士はその武器を最大限に信頼するようになる。それは五〇〇ヤードまでは非常に真つ直ぐに発射される、専門的に言えば平坦な弾道を持つているため、距離の判定の困難はない。これは最大の価値を持つ。弾について言えばその阻止力は望みうる限り最大のものである。ダムダム弾は爆発弾ではないが、膨張弾である。リー・メトフォードの最初の弾丸は基部に開口部があるニッケル筒で覆われた鉛のペレットであった。改善された弾丸ではこの外筒は後方に移動している。基部の穴が少し小さくなり、先端の鉛が露出したままになっている。結果は素晴らしいものであり、技術的観点で見ると美しい機械である。骨に当たると弾丸が「セットアップ」し、あるいは拡がり出てその前にあるものを破って引き裂き、胴では普通致命傷となり、四肢では切断が重要な傷となる。大陸の批判者はそのような弾丸がジュネーブまたはサンクトペテルブルク条約の違反ではないかと尋ねた／しかしこれらの国際協定の条項は膨張弾を禁止しておらず、この主題に関する唯一の規定は特定のサイズ未満の破裂弾を使用してはならないというものである。弾丸は本来殺すことを目的としており、この弾丸は撃たれた者に通常の様々な鉛弾以上の痛みを与えることなく、最も効果的にその義務を果たすと私は見ている。敵が戦闘の進行中にリー・メトフォード・ライフルとダム・ダム弾薬を手に入れたので、後者の点に関する情報が手近にある。感覚はあらゆる弾丸によって生じるものに似ていると言われている。猛烈な麻痺の一撃に続き、負傷と脱力の感覚があるが、その時点での実際の痛みはほとんどない。確かに今日では回復の期間を除いて、傷による多大な痛みに苦しむ不幸な兵士は非常に少ない。兵士が撃たれる。一五分で、つまりショックが消えて痛みが始まる前に通常彼は包帯所にいる。ここでモルヒネを注射され、すべての感覚が均一に

鈍感になる。この状態でクロロホルム麻醉されて手術を受けるのである。

将校の服装を兵士と同じにすることの必要性は、作戦を見たすべての人の目に明らかであった。現地兵士のターバンに対してヘルメットをかぶったイギリス人将校の姿は目立ち、良く狙いをつけた銃火をその方向に引き寄せた。もちろんイギリスの連隊では違いはそれほど顕著ではない。それにもかかわらず鋭い目をした部族民は近距離では常に将校を特別な標的としていた。私が思うには、主に将校はライフルを持っていないという事実によって区別していたのであろう。次の逸話はこれがいかに明白であったかを示しているのかもしれない……

バフ隊がパンジコラ川に向かって行軍しているとき、救援にやってきた王立西ケント隊とイナヤット・キラで行き会った。新しく来た連隊の兵士がバフ隊の友人に前線はどうだったかを尋ねた。「ああ」友人は答えた「将校と白い石の近くに行きさえしなければ大丈夫だよ。」アドバイスが実行されたかどうかは記録が残っていないが、それは確かに本当であった。三日後―九月三〇日―アグラ村で交戦した王立西ケント連隊の中隊では一人の将校のうち八人が撃たれたか、弾丸がかすった。

山岳戦争で軍隊が経験する疲労は非常に大きいため、兵士の負荷を軽減するためにあらゆる努力を払わなければならない。一方で、兵士はより多くの弾薬を身につけて運ぶことが望ましい。弾薬筒箱を積んだラバは撃たれて敵の手に落ちる可能性が非常に高い。私が撤退を記録したシークの二個中隊は九月一六日にそうして六〇〇〇発以上を失った。

イギリスの歩兵の厚い革ベルト、ポーチ、背囊装備は不必要に重い。多くの将校がそれを織物で作ることを提案するのを聞いたことがある。これに反対する言い分は、織物はすり減るということである。基地にこれらの装備を大量に供給し、古い装備が使用に耐えなくなったらすぐに新しいものを支給することでその異議に対処できる。兵士をすり減らすよりベルトをすり減らす方が安くつくはずである。

兵士が戦野に持って行けるチョコレート、小さなソーセージ、または携帯可能で栄養価の高いものを与えることに多大な努力がなされるべきである。行軍が長く、運命が不確実で、しばしば撤退が遅れ、常に圧迫されていた戦争において、連隊や中隊が図らずも一晩中食料なしで野宿しなければならぬ機会が多かった。胃袋が世界を支配していることを思い出してみるのは良いことである。

集中砲撃の原理はヨーロッパで長い間認められてきた。ピンドン・ブラッド卿は、インドの山岳戦にそれを適用した最初の将軍である。以前は砲を二、三門使用するのが慣例で

あった。これまで見てきたようにランダカイの戦鬪でマラカンド野戦軍は一八門の砲を持っていたが、そのうち一二門が一行に並んでいた。この砲の火力は非常な大戦力で優れた陣を敷いていた敵をそこから追い払った。歩兵攻撃はほとんど損失なく成し遂げられ、人命の犠牲は一〇〇人でも安いところを一二人で成功が得られた。

この後、マムンド溪谷ではほとんど砲撃が行われなかったと言えば奇妙に思えるかもしれない。しかし、それは事実である。マムンド族は取るに足らない部族であるが、岩の中に家を建てる／凸凹の地面にいる狙撃手に対して、砲はほとんど何もできない。砲の煙の puff が破裂弾の接近を彼らに知らせるときはいつでも、双眼鏡で敵が岩の後ろに避難するのが見えた。おそらく無煙火薬はこれに待ったをかけたであろう。しかしいずれにせよ、砲が向けられたのは非常に悪い標的であった。

それに本当の大きな働きがあったのは、敵を殺すことではなく、敵に特定の支脈や小丘を占領させないことであった。九月三〇日、王立西ケント隊と第三一パンジャブ歩兵隊がかなりの圧力の下で撤退したとき、英国山岳砲兵隊は敵から七〇〇ヤード以内に移動し、退却線を見渡す高地へ榴散弾の急速な射撃を開始した。そしてそこにいた部族民を殺し、その仲間が丘に登ることを絶対的に禁じたのである。

山の中でのあらゆる後衛戦鬪において、砲の使用は不可欠である。二門の砲でさえ丘の中腹の峰や岩場から歩兵が脱出するのを大いに支援し、適時の砲弾によって味方が撤退した地点を部族民が直ちに占領するのを防ぐ。けれども砲を出し惜しむ理由もないのであって、可能であれば少なくとも二個砲兵隊が旅団の攻撃に同行するのが良い。

回光通信による信号伝達は、作戦全体を通じて最大の価値を持っていた。私は電報通信につながっている信号局の半永久的なラインの優位性を常に認識していたが、そのような複雑な装置を戦鬪中に使用することの実行可能性に疑いを持つようになった。太陽が常に輝いているこの炎熱の国では、ヘリオグラフは常に役に立つ。丘が奪われとすぐに准将との通信が確立され、攻撃が進行中であってもメッセージを迅速かつ明確に送信するのに困難はないように見えた。馬でも移動できるが遅くて骨が折れる、溪谷に頻繁に分断されるこの土地では、それは最も確実で、最も速く、実際に相互通信の唯一の手段である。私はこのことを証言できることを喜んでいる。なぜなら以前馬鹿にしていたからである。

私は歩兵と大砲に触れた。前章はほぼ完全に騎兵に捧げられたが、私は再び馬と槍に戻りたいという欲求に抵抗することができない。騎兵の武器としての剣や槍の問題は長い間議論されてきており、最新の経験を持つ人々の見解について考えてみることは興味深いかもしれない。槍の使用を目撃する機会はなかったが、ガイド隊と第一一ベンガル槍騎兵隊

の両方の多くの将校の意見を聞いた。全員が槍はこの戦争に有利な武器であることを認め、または主張した。確実かつ便利に殺すことができ、騎手が切り倒される危険性が少ない。長さに關しては一般的な意見は短槍を支持しているようである。これは、尻にカウンターバランスを備えており、リーチが良好であり、近接した場所でもより便利である。辺境でも著名な騎兵将校の一人であるビートソン少佐は、これを強く支持している。槍旗を結び付けるか、先端の下約一八インチにある種の鉤を取り付ける必要がある。これを行わないと槍が深く刺さりすぎることがあり、その両方が壊れると敵が身をくねらせて近寄り、槍騎兵を攻撃したりすることがある。これは実際に何度か起こった。

さて、どの程度まで戦隊を槍で武装させるべきかという質問を検討する際、ガイド隊が採用したシステムは興味深いかもしれない。この戦争では騎兵が下馬してカービン銃を使うことが度々必要とされた。槍は邪魔になるので鞍に縛りつけておかなければならない。これには時間がかかり、騎兵が小競り合いしている時には通常、これに費やす時間はあまりない。ガイド隊は四人に一人の兵士に槍を持たせることで問題と折り合いをつけた。この兵士は他の兵士たちが下馬したときも鞍に留まって全員の馬を守る。また、各戦隊槍騎兵の外側の部分も担当するが、これも教練書の指示に従って騎乗したままである。しかし専門的になりすぎたかもしれない。

合同の戦術に少し触れる。辺境戦争では摂理は優れたバンド・オ・バスト「手はず」の側にある。舞台効果や大きなチャンスはない。山に入ったときと同じく高い名声とともに山を離れる准将は自分が有能で賢明な人物であることを証明したのである。すべての「ダツシユ（*突進、衝突、罵り）」を避け、戦いを求めて一日を始めることはなく、いかなる確定的意図も持たず、英雄的な偉業を試みず、時計に目を向ける將軍の元には犠牲者と栄光はほとんどない。敵にとつては過ちを犯すまでは恐ろしくならない。流血のない軍事作戦を信じない大衆は注意を払わないかもしれない。配下の将校たちは戦闘がなかったことに不平を言うかもしれない。しかし義務を巧みに果たし、人命を守ったことに思いを巡らせるなら、彼は大いに報いを受けるであろう。

辺境戦争の全体的な再調査は、その土地を知り、地域を知っていて、より速く動き、より良く射撃できる活動的で積極的な敵と戦う場合、通常の軍隊が大きな不利に晒されることを示している、と私は思う。スワット渓谷の部族民が被った恐ろしい損失は、開けた場所では訓練された軍隊が最も勇敢な野蛮人をいかに簡単に掃討できるかということを示している。しかし、丘の斜面ではすべてが変化し、観察者は近代的兵器の強さではなく弱さに驚く。大胆なライフル射手が個人として兵士よりも優れており、最大の疲労に耐え得るならば、その行く手を遮ることはできなくとも、常に損書を与えることができる。

キューバでスペイン人が直面している軍事的問題は多くの点でアフガニスタンの渓谷に見られるものと似ている。道がなく、出鱈目で未発達の国／いかなる戦略的重要地点もなく／優れた機動性を持ち、近代的ライフルで十分に武装してゲリラ戦術を採る敵。結果はどちらの場合も、軍隊は敵を捕まえる以外、どこへでも行き、何でもできるといふことある／そして、そのすべての行動には必ず損失を伴う。

部族を征服するという問題を純粹に軍事的な観点から見れば、時間が問題にならず、長期にわたる作戦が本国の政策の変更によって中断される危険がなければ、司令官は部族民が攻撃を当然と思ひ込むよう誘導するべきである。この点において私は発言をスワットとバジャウルの平底の谷に限定しなければならない。マムンド族のような部族を威圧するために混成旅団は谷の入り口でキャンプするのである。そしてイナヤット・キラのように塹壕を掘って非常に強力に防御する。部族民は丘を離れようとしないうため、騎兵隊は毎日全く安全に谷をパトロールできる。作物の播種と農作業はすべて停止される。現地人は夜キャンプに発砲して報復するであろう。これにより損失が発生する／しかし、誰もが眠るのに良い穴を掘り、将校が日没前に夕食をとるようにし、日没後に勤務外で歩き回ることを禁じた場合、損失が深刻になる理由はない。やがて、彼らの谷の占領に激怒し、恐らく食料不足と冬の接近により捨て鉢になった部族民は、キャンプを襲撃するための途方もない企てをするであろう。強力な塹壕、突進を断ち切る仕掛け線、そして近代的ライフルで、彼らは大虐殺とともに撃退され、一度厳しく罰せられたならおそらく協約を請うであろう。そうでない場合、彼らがそうするまでプロセスを継続するのである。

そのような軍事政策は先に私が記録した強健な方法と同じくらいの費用がかかる。より少数の軍隊が利用されることになるかもしれないが、彼らは動員されたまま、より長い期間戦野に留まる必要がある。しかし人員の損失ははるかに少ないであろう。この方法の成功の良い例として見出されるのはナワガイでのビンドン・ブラッド卿の戦術である。彼は自軍が敵を攻撃するには弱すぎたため、敵を攻撃するように仕向け、そして大変な損失とともに討ち払ったのである。

私たちが今到達した点から、今日のより大きな軍事問題を手早く、さつとではあるが一瞥することはおそらく望ましくないが、可能である。私たちはここ数年、「短期勤務」システムを採用している。それは大陸システムである。それには多くの欠点がある。その下で集められた軍隊は、若さ、訓練の不足、連隊の提携の欠如に苦しんでいる。しかし大陸ではこれに一つの卓越した長所がある…膨大な数が提供されるのである。現役の軍隊は単に兵士を迅速に製造して予備軍に渡し、それが必要になるまで蓄えておくための機械にすぎない。欧州諸国は兵士を量だけで論じている。必ずしも高い水準の勇気と訓練を求められないが致命的な兵器で武装した兵士の巨大な軍隊が、さまざまな戦略的条件の下でお互い

に向けられている。数千人が虐殺され、大きな戦闘に勝ったり負けたりした後で、彼らは前の状態に戻る。二つの国の勇気の平均値はおそらく決まっているのであろう。大陸システムの本質は、その巨大な規模である。

私たちはこのシステムを一点を除くすべての点で採用しており、その一点が重要なのである。私たちにおいては量が多くはなく、質が劣っているのである。短期勤務システムによって数が少し増やされ、水準がかなり低下させられたのである。大陸の要件に非常によく適合しているこのシステムが私たちに利点を与えない理由は明らかである。私たちの軍隊は志願兵役によって募集されている。短期勤務と徴兵は切り離せない。このため数人の断固たる軍人が徴兵を提唱している。しかしイギリス人がそうした自由の剥奪、またはそのような商業への足手まといを甘受するまでには多くの言葉が語られ、多くの投票がなされ、多くの打撃が加えられなければならない。そうした犠牲が払われることになるのはイギリス海峡が干上がったときであらう。

徴兵制なしには私たちは大きな数を持つことはできない。したがって、私たちは持っているものを最高の品質にする努力をするべきである／そして私たちの状況と必要がこの見解を強化する。私たちの兵士には大人数の戦いは求められないが、非常に頻繁に白兵戦が要求される。その遠征は温暖な気候の文明国での戦いではない。彼らは海を越えてアフリカやインドの辺境に送られ、そこで暑い太陽の下で、そして疫病の多い土地で、強健な野蛮人との独特の戦闘に従事している。彼らはその任務に十分な年齢ではない。

若くともその優れた武器と支配的民族の威信によって、彼らは現地軍に対する優位を維持することができる。たしかに今回の戦争では重要でない、取るに足らない、いくつかの事件が発生した。それは事実である。しかし帝国の利益のためには便宜的に忘れたほうが良い。現地兵の多くはイギリス兵よりも一〇歳年上である。その多くは軍務に就き、銃火をくぐっている。そのいくらかはメダルを持っている。もちろん、全員が自然条件に慣れている。彼らがどれだけ多くの利点を享受しているかは明らかである。また、彼らが何らかの優位を持っていると思ひ込んだ場合、結果がどれほど深刻になるかは明らかである。そうした仮定ですら、インドにおける私たちの存在そのものへの脅威となる可能性がある。真価（*Intrinsic merit）を持っていることがその属国に対する支配的民族であるための唯一の資格である。もし私たちがこれに失敗したのであれば私たちの精神が古くて弱くなったからではなく、兵士が若く、まだ強くなっていないからである。

二一歳や二二歳の少年たちが、円熟して人生の最盛期にある三〇歳のシークやグルカと同等の条件で競争することを期待されている。不公平なテストである。彼らがなんとか持ちこたえているということは、私たちの民族の活力の素晴らしい証である。試みは危険で

あり、費用もかかる。私たちはそれを続けている。イギリス軍がいつか再び大陸戦争に参加するという考えを今なお胸に秘めているためである。英国の人々が、自らの小さな軍隊が大陸の無数の軍隊の間で粉砕されて地に落ちるのを許すほど愚かであったなら、必然的にふりかかってくるすべての不幸が彼らにはふさわしいであろう。

私はこれらの主張が独創的でも目新しいものでもないことを知っている。単に整理しただけである。私はまた国家の職務に一生を捧げた有能で立派な人々の中にも、私が引用した見解と相容れない人々がいることを知っている。この問題はインド人の観点から考えられてきた。おそらく五歳年上の部下を率いてイギリスの連隊を指揮したがるインド人大佐はいないであろう。この主題に関するインド人の意見は偏った情報のみに基づいており、現地環境によって歪められている可能性がある。それでも私は、軍がジュビリー行進と辺境戦争のみならず、下院において示される評価においても同時にそうした傑出した地位を占めているのであれば、国民一般の考えを甘受することが正しいと思っている。

具象から抽象に移るなら、非常に多くの勇敢な行為を記録している本書の中に、兵士が自らを大きな危険にさらし、その中に留まった動機の本質に関する簡単な問いが含まれることは不適切ではないであろう。戦争の環境には神経を揺るがすあらゆる要素が含まれている。弾丸の口笛／多くの野蛮な敵の叫び声と怒鳴り声／血に覆われ、時には痛みで泣き叫ぶ負傷者の哀れな様相／全ての側面において死が歩を進めている場所を示すホコリの噴出—これらは兵士を襲う光景と音であり、成長と教育によって彼らはその重要性を完全に認識しているのである。それでも、兵士の勇気は美徳の最も一般的なものである。全住民から無作為に選ばれた何千人もの人々が、自己保存の本能を制御することがわかっている。この勇気も特定の国に特有のものではない。勇気は一般的なものであるだけでなく、全世界的なものである。しかし多くの人が所有していると思われるこの美徳について、全ての人が最高のものを持っている、というのは人生の明らかな矛盾である。不幸なことではあるが、臆病者として晒されることを恐れない人はおそらくいない。なぜこの一般的なものが貴重なのであろうか？どう説明できるのであろうか？

こういうことではないだろうか。兵士の勇気は実際には肉体的な害の軽視や危険に対する無関心ではない。これらの気質を装う試みは、多かれ少なかれ成功している。ほとんどの人物は演劇において良い俳優になることを目指している。俳優であるとは全く思えないほど完璧な人物もいる。これはその他の人々が努力して目指している理想である。また非常にまれにしか達成されていないものでもある。

準備、虚栄心、感情という三つの主要な影響が組み合わさって、兵士の試みを支援する。最初のものには規律と訓練のすべての力が含まれている。兵士は何年もの間砲火の下をく

ぐる可能性について考えてきた。それはどのような経験であろうか、と漠然と思っていた。それをくぐり抜けて無事に戻った多くの人々を見た。その好奇心はそそられている。そして今、その機会が訪れている。道路と鉄道によって彼は日ごと現場に近づいている。その心は前途に慣れ親しんでいる。仲間も同じ状況にある。彼は習慣に順応する。その背後には環境の持つ力が隠れている。ついにその時がやって来る。彼は遠くで煙のパフが吐き出されるのを観察する。空中の音に耳を傾ける。多分何かのドシンという打撃音を聞き、近くの兵士が撃たれたキジのように倒れるのを見る。次は自分の番かと思う。恐怖がその喉を固く握る。

そのとき、非常に多くの美德を促進する悪徳である虚栄心が自らを主張する。彼はその仲間を、仲間は彼を見る。これまでのところ自分は弱さの兆候を見せていない。彼は考える、仲間は自分を勇敢だと思っている。心から切望する名声がその眼前に輝いている。そして彼は受けた命令を実行するのである。

しかしヒーローになるにはまだ別のものが必要である。さらなる困難な試練とさらに厳しい苦難が降りかかって彼を手助けしなければならぬ。最後に違いを生むのは感情である。疑う人は夜にキャンプの焚火に出かけて兵士の歌を聞いてみると良い。誰もが自分が高高く尊いと考える、あるいは必要な時に至れば自分をこの世から引き上げてくれる何ものかにすがっている。おそらく自分は古い血統、そして常に死に方を知っていた民族の出自であることを覚えているためであり／あるいは、おそらくもつと小さく、もつと親密なもの／連隊が「ゴードン」、「バフ」、「女王陛下の」、「何と呼ばれようと、そうした名前／単なる大隊の非公式の名前に過ぎないが」をととても大事にすることで偉業が成し遂げられ、名誉と英国民の帝国が維持されるのである。

名前の問題に関しては、連隊に短い名前をつけることの利点を知ることには有意義であろう。誰もがマチアス中佐のゴードン隊へのスピーチを覚えているであろう。一部の連隊に向けたスピーチが領土システムの途方もない肩書を負わされていることをちよつと想像してみると良い。たとえば、キプリング氏の有名な連隊「ホーエンツォレルン―シグマリント―アンスパツハ王女のマーサーティ・ドビルシャ―の王立軽歩兵隊」など。古い連隊が始まった頃はすべて同様に名付けられていたのである。

これはおそらく血も涙もない章であった。私たちが標的と考えてきた人々／自らの家と丘のために戦って単なる攻撃の目的とされた部族民／は単なる戦争の浪費物として殺され傷つけられた人間たちである。どうすれば勇気という高貴な美德を大量生産できるかを知ろうとして私たちはその分析さえも試みた。

哲学者は残念な思いをするかもしれない、慈善家は痛みに嘆き悲しむかもしれない。人類の scientific（*系統立った、科学的）な破壊に多くの人の注意が向けられるべきである／しかしビジネスライクな時代の現実的な人々は―天使ではなく―人間の世に住んでいることを覚えており、それに応じて自分の行動を調整するのである。